

社会的ジレンマの第三者罰の評価

—質問紙実験による解明—

齋藤文佳

本研究は、小野田竜一講師の研究プロジェクト『社会的ジレンマを解決に導く罰行動が引き起こす集団間の報復行動の連鎖(科研費研究課題番号:20K14137)』の一環として行われた。

社会的ジレンマ (SD) は集団の協力問題である。集団の中で全員が協力して利益を得るよりも非協力したほうが個人的な利益が多くなるが、全員が非協力をすると全員が協力する場合よりも全員の利益が小さくなる状況のことである(山岸 2000)。集団の協力問題の例として環境問題が挙げられる。

協力問題や SD を解決する方法として罰の導入がある。罰とは集団の利益のために非協力者を罰することで非協力者の利益を減らすことである。SD における罰には第三者罰と第三者罰が存在する。先行研究では第三者罰に関する研究が多く行われているが、現実の集団協力問題では SD における第三者罰も起きている。

本研究では、2つの集団のそれぞれで社会的ジレンマを行っている際の外集団成員が罰行動を行う外集団罰条件、内集団成員が罰行動を行う内集団罰条件、社会的ジレンマを行っておらず唐突に攻撃行動を行う攻撃条件において、罰行使者の行動の印象や罰行使者自身の印象を質問紙実験で比較する。また、それぞれの人に対する信頼ゲームでの信頼行動も測る。

本調査は小野田ゼミ現4年生岡優貴と共同で作成し、実施した。本調査は、小野田ゼミに所属している学生と卒業生12人に対して、場面想定法質問紙を行った。

3つの条件の結果を比較したところ、全体的に攻撃条件と外集団罰条件、攻撃条件と内集団罰条件の間には有意差がある項目が多かったことが分かった。外集団罰条件と内集団罰条件の間では条件ごとに有意差が無いことが多かった。

SD における第三者罰は攻撃行動よりも、向社会的な罰行動に近いことが分かった。

今回の質問紙調査の問題点は標本が12と少ない数であった。また、今回の質問紙調査の対象は現役の小野田ゼミ生やその卒業生であったため、研究の目的を知っている人ばかりであった。今後は、関係者だけでなく研究の目的を知らない一般人にも調査を行いたいと考える。